

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19H01555

研究課題名（和文）戦争災害記録の文化財化に関する研究 - 沖縄県渡嘉敷村を対象として

研究課題名（英文）Study on Cultural Property of War Disaster Records-For Tokashiki Village,  
Okinawa Prefecture

研究代表者

麦倉 哲 (Mugikura, Tetsu)

岩手大学・教育学部・嘱託教授

研究者番号：70200235

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 9,900,000円

研究成果の概要（和文）：研究計画の通り、戦争体験者約100人の聞き取り調査を実施した。調査で明らかにしたのは、戦争体験者の証言を通して、戦争犠牲死者の生きていた様子と犠牲となった状況である。戦争による犠牲死の検証なくして戦争の研究にはならない。本課題は犠牲死者の多様は死を明らかにし、そこに生命の格差があることを解き明かすことができた。戦争犠牲死を戦争文化財として継承する研究の道が開けたといえる。研究の成果は、5本の学術論文に著し、1つの論考にし、学会誌の巻頭言で叙述し、8回の学会報告をし、1回の学会ラウンドテーブルの話題提供者となった。また、渡嘉敷村の文化財委員としても貢献した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦争における犠牲死を災害社会学の視点でとらえた。沖縄県渡嘉敷村における戦災死の検証を徹底した。これまでの犠牲死に関する調査は不十分であった。そこで、戦災死を防ぐ対策の欠如に由来する犠牲死の累積という観点から、実態解明をした。一般の戦争研究では、個々の死の検証の視点が脆弱で、戦災犠牲死を防止する対策へと到達しえない。

本課題では、戦争における死のリスクにおいて明確な格差が存在していること、日本において戦争で死ぬことを要請する文化的下地があり、権限の上位にある者も最後には死ぬ前提なので下位の者の生命を尊重することができない。一人ひとりの戦災犠牲死の記録と検証結果を文化財として継承する道筋を開いた。

研究成果の概要（英文）：As per the research plan, interviews were conducted with approximately 100 people who had experienced war. The research revealed the lives of war victims and the circumstances in which they were sacrificed, through the testimonies of those who experienced the war. There is no point in studying war without examining the sacrifices made in war. In this project, we were able to clarify the diversity of victims and the disparities in life. It can be said that the path has now been opened for research that preserves war sacrifices and deaths as war cultural assets. The results of my research were written in five academic papers, one essay, described in the preface of an academic journal, presented at nine conferences, and was the topic of one conference roundtable. He also contributed as a cultural property committee member for Tokashiki Village.

研究分野：社会学

キーワード：戦争文化財 戦争災害 集団自決 戦災犠牲死 集団強制死 災害検証 災害伝承 生命の格差

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 本研究の学術的背景、研究課題の核心をなす学術的「問い」

本研究は「戦争災害記録の文化財化に関する研究 - 沖縄県渡嘉敷村を対象として」を主題とし、沖縄県渡嘉敷村をフィールドとする「戦争における生と死」に関する社会調査研究である。渡嘉敷村における戦中と戦後の体験について、住民の体験に焦点を当て、インテンシブなフィールドワークを実施し、記録化し、各種先行文献・資料を精査したうえで、分析・総合し、よって将来長きにわたって活用される島の歴史文化財としてのこすことを目的とする。戦地となった島で住民が経験した身近な死をめぐって、死者に関する事実と、生者に関するライフヒストリーについて多様な調査を実施し、戦争の影響を受けた生と死の記録を島民が共有できる文化財として将来にわたって残すものである。

この研究は単に戦史研究にとどまらず、災害検証の視点で戦争による死を災害における被災死と同様に位置づけ、災害の再発を防止する目的のために、死の状況を検証し死と向き合う生きる生の文化を明らかにするものである。通常、死の状況については克明な調査が実施され、その原因について徹底した検証が求められる。災害においても同様で、調査研究の成果が防災対策に反映される。戦災による死もまた同様である。それゆえに、戦災による犠牲死の解明し尽くすことが求められる。太平洋戦争における犠牲が日本史上最も深刻である以上、学術的な営みとして災害検証を尽くし、その結果を後世につなげることが、災害史研究における最も重要な使命である。

渡嘉敷村の戦争体験については、集団自決が起こった状況をめぐって、多様な著述者やジャーナリストによる調査や取材が行われてきた。軍の関与をめぐっては裁判（「大江岩波裁判」）で争われるに至り、一定の到達点が示された。しかしながら、軍命をめぐって住民からどのような証言を引き出すかどうかということが焦点となったため、戦死者一人ひとりの人生に焦点を当てたり、生存者一人ひとりのライフヒストリーを記録したりするを經由して、戦争体験を子細に分析し全体像を示すという点では依然として未解明のことが多く残されている。渡嘉敷村で聞き取り取材をした文筆者・ジャーナリスト（謝花直美、川田文子ら）は一定の証言を発掘しているが、本申請者が聞き取りした事実と照らして一部に事実誤認が含まれており、周到な調査に基づき事実を確定することが課題として残されている。他方で、学術研究の立場で徹底した聞き取り調査の先行例は乏しい。住民が自分たちの歴史として共有できる戦災史の集大成が求められており、住民は将来に伝承すべき知的文化財を待望している。2017年12月に渡嘉敷村は文化財審議会を開催し、戦争体験の証言資料化の方針を決め、本申請者も学識委員として委嘱された。

## 2. 研究の目的

### (2) 本研究の目的および学術的独自性と創造性

本研究の「学術的独自性」は、住民が経験した戦争体験に焦点を当てるところにある。兵士に聞くことも重要だ。しかし、戦隊員で存命の人は非常に限られ、聞き取り事体が事実上は困難である。その一方で住民については、1945（昭和20）年の当時に5, 6歳から17, 18歳くらいまでの住民は、現在も存命の方が少ない。こうした方がたの戦中と戦後の経験を聞き取り、記録することの重要性が増している。戦後73年を経過した今（申請時2018年）、当事者の高齢化の進展を迎え、調査研究作業が急がれる。集団自決を伴う沖縄の戦地では、住民がひとたび戦争体験について証言すれば、様々な圧力がかかったり取材者が殺到したりするというリアクションにさらされたために、志をもって証言してきた人を除けば、口を開くことのためにららをもつことが少なくなかった。

これまで渡嘉敷村を題材にした文献は多い。しかし、当事者が語ったものは、渡嘉敷村史資料編、沖縄県史（2回）のほかで住民の人生史に迫るものは、小嶺幸吉が自費刊行したものや、金城重明（聞き取り調査後の2022年逝去）の著作ほか数点以外にはない。住民が記録を残そうとしたり証言したりする機会は、これまで2度ほどあった。第一回は、村史資料集や県史をつくる時と、そして第二回は教科書問題が浮上した

時である。村史に体験記を残したのは、小嶺幸信ら村役場職員はじめ島の著名な方がたである。教科書裁判が目撃された時期に勇気をもって証言した人は、黙っていることはできないと決意した吉川嘉勝や、新垣守信や、新崎直恒など、教育者や実業家としての使命感を持った、やはりリーダー的な存在の人たちである。しかしながら、本申請者が着手した調査では、これまで語らなかった多くの住民や元住民が語りだしている。リーダー的な人たち以外の数多くの人たちが、本予備調査では聞き取り調査に協力している。亡き人のことを忘れず皆で供養し、住民たち自身の戦中・戦後の記録を残したいという趣旨に賛同している。

### 3. 研究の方法

代表者が本研究のために、予備的に実施してきた各方面での聞き取り調査結果の精査と、今後計画期間に実施される膨大な調査の実施および整理と、それらの分析と総合のためには、相当の時間と作業量と経費を要する。最初の3年間に於いて継続中の調査を貫徹し、残る2年間に於いて分析と総合的な検討を行い、最終的な成果の取りまとめに費やしたい。研究の計画は次の通りである。

第一段階として、これまでに刊行された文献、資料の収集および分析をつくる。軍の陣中日誌および一般に出版された刊行物には、事実をめぐる疑問点が出されてきたのでこれを整理しつつ、これまでに代表者が聞き取った証言との異動や矛盾点について精査する。第二に、関係各方面に関する各種資料を収集する。沖縄県平和の礎に関する戦没者データについては学術目的で開示を受けており、このデータベースと渡嘉敷村の戦没者名簿における異同の精査をする。この件では、沖縄県渡嘉敷村における住民登録データの開示請求を行っている。戦中・戦後の各種地図の収集、米軍が撮影した各種写真の収集、日本軍関係記録、米軍関係記録の収集分析を行う。

第三に、行政関係者や学術研究関係者との協力や連携を進める。沖縄県渡嘉敷村長、渡嘉敷村教育長、渡嘉敷小中学校長、阿波連小学校長、歴代渡嘉敷区長、歴代阿波連区長、歴代村長、歴代副村長との連携しつつ各種情報を収集する。渡嘉敷村文化財審議委員や、渡嘉敷村出身の戦史・郷土史研究者（金城重明（聞き取り調査後に故人）、吉川嘉勝、吉川勇助、小嶺幸吉、新崎直恒、源啓祐、座間味昌茂、米田英明等々）との連携を進め、各種資料を収集する。伊江村役場関係者、伊江村教育委員会、渡嘉敷村への強制移住経験者、わびあいの里謝花悦子代表と連携しつつ、関連する情報を収集する。座間味島関係（第一戦隊配備地）について宮城晴美、阿嘉島・慶留間島（第二戦隊配備地）関係で元戦隊員深沢敬次郎（聞き取り調査後の2022年逝去）と連携しつつ、関係資料を収集する。第四に、関係住民等への聞き取り調査を実施する。渡嘉敷における生と死について、明らかにする対象は、戦争によって死亡した人と、戦争を体験し戦没者と向き合ってきた人であり、それぞれの人生を追う。

本研究は、こうした下準備のもとに、約100人の戦争体験者（住民70人、元住民30人）、約50人の関係者、渡嘉敷村、伊江村、沖縄県の行政担当者、戦災者・戦争経験者の家族、郷土史研究者、約10人の伊江島からの強制移住者からの聞き取り調査を重ねて、594人の戦没者の生きた証の記録化と死亡状況の検証記録化、

証言者150人の戦争体験、身近な死に直面した経験、さらには戦中と戦後の人生史の記録化、その中で身近な死と向き合ってきた人生史を記録化し、犠牲死と向き合ってきた精神文化の質を明らかにしたい。

他方で、戦中の存命者や証言者については、戦中の経験を記録化し、家族等の身近な死と向き合ってきた人生史を価値づけ、ライフドキュメントとして、やはりこの時代に生きた記録の文化財として制作したい。死をめぐる故人と遺族等との対話も記録する。死と向き合った生存者：家族等、身近な死に直面した遺族の戦後史、のことである。研究の成果は、比喩的であるが、戦争の犠牲者に伝わるものにしたい。無念の死を遂げた戦争の犠牲者に対して、故人のどのような状況で、どのような心情で末期に直面していたのか、共感的に理解し、故人の供養と尊厳の回復のために、手向けられるような記録であり、文化的な資源に仕上げたい。

#### 4. 研究成果

##### (1) 1年目(2019年度)の成果として

次の論文を執筆した。 麦倉哲「犠牲者を忘れ去る国家に本当の復興はない, 戦災も震災も 岩手県大槌町と沖縄県渡嘉敷村での調査から」『日本の科学者』Vol.54-Nov.(日本科学者会議)Vol.54-Nov.PP.24-29.2019年11月号。 麦倉哲「戦争の社会病理 日本兵によって処刑された沖縄県民」『岩手大学教育学部研究年報』(岩手大学教育学部)Vol.79.PP.109-123、2020年3月。次に、以下の学校報告、招待講演を行った。 麦倉哲「戦争の社会病理 - 日本兵によって処刑された沖縄県民」(日本社会病理学会・自由報告、第35回大会(於:産業流通大学)、2019年9月29日)。 麦倉哲「犠牲者の記録をのこし語り継ぐこと 戦災も震災も」(沖縄法制研究所第43回講演会・招待講演、於:沖縄国際大学、2020年2月15日)。

##### (2) 2年目(2020年度)の成果としては

学術論文: 麦倉哲「戦争の社会病理 - 日本軍によって処刑された朝鮮人軍夫 -」(沖縄国際大学沖縄法政研究所『沖縄法政研究』(23) 1-27頁 2021年3月5日)。 学会発表: 麦倉哲「戦争の社会病理 3 渡嘉敷島で処刑された6名の伊江村民」(日本社会病理学会第36回大会、於:神戸学院大学・オンライン、2021年3月14日)。

##### (3) 3年目(2021年度)の成果として

論文執筆では、「戦争の社会病理 3 - 渡嘉敷島で処刑された6名の伊江村民」(『岩手大学文化論叢』第11輯、67-88頁、2022年3月17日)を執筆した。 学会報告では「戦災犠牲死の検証にもとづく文化財とするために - 戦災で犠牲となった沖縄県渡嘉敷村民調査から -」第94回日本社会学会大会(2021年11月13日、オンライン)。 同じく学会報告として「戦争の社会病理 - 第二の玉砕場で亡くなった渡嘉敷村民 -」(日本社会病理学会第37回大会(2022年1月9日、オンライン))。

##### (4) 4年目(2022年度)の成果として

日本社会病理学会第38回大会(2022年11月)において実施された「ラウンドテーブル「『最悪の社会問題・社会病理』としての戦争」において、「戦死・戦没者の死の検証と『生命の格差』」の題で報告した。 日本社会病理学会大会の自由報告において、「戦争の社会病理 子どもが犠牲となること」と題して報告した。 日本社会学会第95回大会(2022年11月)の自由報告において、「戦時下の渡嘉敷村における日本兵の死-戦争の社会病理」と題して発表した。

##### (5) 5年目(2023年度)の成果として

日本社会病理学会機関誌(『現代の社会病理』Vol.38、2023年8月)の巻頭言として「災害も戦災も社会病理学の研究テーマである」を執筆した。 同機関誌への依頼原稿として「戦死・戦没者の死の検証と『生命の格差』 - 渡嘉敷島の戦争から」を執筆した。 日本社会病理学会第39回大会(2023年9月)において、「ハンセン病元患者家族Aさんが歩んだ苦難の淵」と題して報告した。 日本社会学会において「渡嘉敷島における集団死の場所へ行かなかった人びと 戦災犠牲死の検証から伝承文化の構築へ」と題して発表した。

##### (5) 埋もれてはならない犠牲死の検証 - 継承すべき文化材化の1例として

###### 山羊狩りと斬殺と\*

既存の渡嘉敷村での調査研究は限られたものであり、限られた資料をもとに裁判で争われるということ

もあった。こうした中で、5年間の課題研究の成果により、新規の歴史的事実を発掘することができた。このことは、論文発表や学会発表によって注目されるのみならず、存命中の証言者間の関心を引き起こすことにもなった。これらの諸事実を整理統合した平易で伝承しやすい教育教材を作成することが、次の大きな課題として残されている。プロジェクト代表者は協力者の協力をえて、5年間の成果を次の制作につなげていきたい。

以下は、注目された事実の一端であり、集団自決（強制集団死）の渦中で奇跡的に命をつないだ少年が初めて語った目撃事実であり、犠牲者を供養する気持ちを約80年間持ち続けてきた人生史である。

ある日、日本兵の数人が、阿波連の集落に近い野原で、山羊狩りをしていた。そのグループ内には、ただひとり朝鮮人軍夫（軍属）も混じっていた。島の食糧難は深刻で、この状態は日本兵にとっても同様であった。6月、7月にいたると、兵士が傷病で亡くなっているという記録が目立ってきた。病気と言っても、餓死が多いのである。

兵士たちの山羊狩りの様子は、G少年にとっては面白そうなので、山羊狩りに加わった。日本兵が山羊を追い立て、最後に、朝鮮人軍夫が、それを捕まえるのである。しかし、その捕まえる瞬間に、軍夫は山羊を捕まえきれず、逃してしまった。すると、日本兵の形相が一変し、軍夫を激しく叱責した。

その様子を少し離れたところから見ていた少年に対して日本兵は、「おにいちゃん、あっちに行つて」と命じた。ここで逆らってはいけなかった少年は、その場を立ち去った。騒動の様子が見えないところまで急いで立ち去った。叱責する声はひびき、物音もした。そのことがあってしばらくして、日本兵が去った後に、少年は、さっきの現場におそるおそる戻ってみた。

するとさっきの現場あたりに、掘り返し、埋め戻したような跡があった。少し掘ってみると、そこには殺害された遺体が埋められていたのである。戦争が終わってからG少年は、島の集落の人にそのことを伝え、掘り返した。遺骨が収集されたのである。遺体が埋められていた場所を覚えておいたGさんは、後に祠をたてた。

ところで、日本兵はなぜ、山羊狩りのために一人だけ朝鮮人軍夫を加えたのか。そしてなぜ、山羊を取り押さえられなかっただけのことで、軍夫を殺害したのであろうか。兵士はみな飢えて、山羊を取り逃がすというヘマをした朝鮮人軍夫への怒りが沸騰し、許しがたかったのだろうか。それで殺害したとするならば、命の格差は激烈で、ちょっとした失態の責で、殺す側と殺される側になってしまうほどに、特に戦時下でははなはだしいということである。この1件は、通常で考えれば「殺人事件」ということである。

別のことも考えられる。最初から、朝鮮人軍夫をこのあたりで殺そうと計画していたのだろうか。殺してどうしようとしていたのだろうか。その場から立ち去るように命じられたG少年は、殺害の様子とその後の処置の様子をみていないから、その以後のことは不明である。

そしてもう一つ、朝鮮人軍夫はなぜ、山羊を取り逃がしたのであろうか。素早く逃げる山羊を捕まえるほどに、俊敏に動く体力を、もはや持ち合わせていなかったのかもしれない。また、これは筆者の想像であるが、捕まれば食べられてしまう山羊の運命を思った軍夫は、それと自分の身を重ね合わせて、山羊をつかまえる腕の力がにぶったのではなからうか。山羊の命を不憫に思う気持ちがどこかにあったのではないだろうか。

この軍夫の命と向き合ってきたのは、Gさんである。何かの理由をつけられた処刑として葬られたのでもない、埋もれた戦争の犠牲死がここにあった。その死を思う機会をGさんから与えられた。犠牲となった朝鮮人軍夫の最期の場所を案内してもらい、手を合わせ供養し、忘れてはならない犠牲死として、戦死の歴史に加えたいと思った。

\* 本節の内容は、Gさんへの聴き取り調査（2017年～2020年）結果による。学術論文：麦倉哲「戦争の社会病理 - 日本軍によって処刑された朝鮮人軍夫 -」（沖縄国際大学沖縄法政研究所『沖縄法政研究』(23) 1-27頁 2021年3月5日）にも収録されている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 麦倉哲	4. 巻 11
2. 論文標題 戦争の社会病理 3 - 渡嘉敷島で処刑された6名の伊江村民	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岩手大学文化論叢	6. 最初と最後の頁 67 88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 麦倉哲	4. 巻 23
2. 論文標題 戦争の社会病理 - 日本軍によって処刑された朝鮮人軍夫 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 沖縄法政研究	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 麦倉哲	4. 巻 54
2. 論文標題 犠牲者を忘れ去る国家に本当の復興はない、戦災も震災も 岩手県大槌町と沖縄県渡嘉敷村での調査から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本の科学者	6. 最初と最後の頁 24-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 麦倉哲	4. 巻 79
2. 論文標題 戦争の社会病理 日本兵によって処刑された沖縄県民	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岩手大学教育学部研究年報	6. 最初と最後の頁 109-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 麦倉哲	4. 巻 10
2. 論文標題 岩手県内樺太引揚者のファミリーヒストリーその1 盛岡市編	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岩手大学文化論叢	6. 最初と最後の頁 11-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 麦倉哲
2. 発表標題 災犠牲死の検証にもとづく文化財とするために - 戦災で犠牲となった沖縄県渡嘉敷村民調査から -
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 麦倉哲
2. 発表標題 戦争の社会病理 - 第二の玉砕場で亡くなった渡嘉敷村民 -
3. 学会等名 日本社会病理学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 麦倉哲
2. 発表標題 戦争の社会病理 3 渡嘉敷島で処刑された6名の伊江村民
3. 学会等名 日本社会病理学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 麦倉哲
2. 発表標題 戦争の社会病理 - 日本兵によって処刑された沖縄県民
3. 学会等名 日本社会病理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 麦倉哲
2. 発表標題 戦時下の渡嘉敷村における日本兵の死－戦争の社会病理
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 麦倉哲
2. 発表標題 戦死・戦没者の死の検証と「生命の格差」
3. 学会等名 日本社会病理学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 麦倉哲
2. 発表標題 ハンセン病元患者家族Aさんが歩んだ苦難の淵
3. 学会等名 日本社会病理学会
4. 発表年 2023年



1. 発表者名 麦倉哲
2. 発表標題 渡嘉敷島における集団死の場所へ行かなかった人びと 戦災犠牲死の検証から伝承文化の構築へ
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------